年　　月　　日

曲　名	
作曲家	
演　奏	
研　究	SAMPLE
感　想	

年　　月　　日

SAMPLE

年　月　日

SAMPLE

年　月　日

SAMPLE

西洋の音楽史と作曲家、その主な作品

古代、中世、ルネサンスの音楽

楽譜がなかった頃の古い時代の音楽については、よくわかっていない。しかし壁画や彫刻などから、古代エジプトの宮廷で音楽が重要な役割を果たしていたことをうかがうことができる。ギリシャ時代には、祭りの時に、キタラという弦楽器や、アウロスという縦笛が用いられ、ピタゴラスが音律の理論を確立したと考えられている。ローマ時代、音楽は娯楽としては奴隷によって奏されていたようだが、キリスト教が公認されてからは、キリスト教会の中で発[illegible]

キリスト教は典礼儀式で[illegible]く響くように節がつけられていった。このような歌は紀[illegible]6世紀頃、教皇グレゴリウスⅠ世によって集大成されたといわれている。

SAMPLE

12世紀頃には、パリのノートルダム寺院のレオナン、ペロタンにより、単声聖歌に音が重ねられたり、旋律がより複雑で動きのあるものになっていった。そして中世後半になると、マショーらによって多声音楽（ポリフォニー）が発達していく一方、世俗音楽の作品も作曲されるようになった。世俗歌謡の伝え手として南フランスを中心に騎士階級で詩人兼歌手のトルバドゥールが活躍し、その影響を受けて北フランスではトルヴェール、ドイツではミンネゼンガーが生まれ、それらはしだいに市民階級に受け継がれていった。

ルネサンスになると、人間の精神や感情の探求が進み、世俗音楽が花開いた。また、楽器の発達に伴い、多くの器楽曲が書かれた。フランス、イタリア、イギリスを中心に、引き続きラテン語で対位法技法によるポリフォニーの教会音楽が発展していく中で、ドイツではルターの宗教改革によりプロテスタント派の教会が生まれ、ドイツ語の歌詞による旋律に和声法による伴奏をつけたコラールが歌われた。

ルネサンス音楽の作曲家

◎ジョスカン・デプレ［1440頃～1521フランドル］

現在のネーデルランド地方を中心に、教会や宮廷で活躍した。「音楽会のプリンス」と仰がれ、数多くの宗教曲や世俗曲をのこした。

◎パレストリーナ［1525頃～1594 イタリア］

イタリアの教会音楽か。教皇マルチェルスⅡ世が、当時歌詞が聞き取れないほど複雑になったポリフォニーによる音楽を批判したため、歌詞がはっきり聞き取れるミサ曲「教皇マルチェルスのミサ」を作曲した。

◎**チャイコフスキー**［1840～1893 ロシア］
３大バレエと呼ばれる「白鳥の湖」、「眠れる森の美女」、「くるみ割り人形」を作曲した。交響曲第６番「悲愴」、序曲「1812年」、「スラヴ行進曲」、ピアノ協奏曲第１番、ヴァイオリン協奏曲なども有名。

◎**ドヴォルジャーク**［1841～1904 チェコ］
当時のチェコ国民音楽を興そうという気運の中で、民族色豊かな作品を作った。後に招かれて数年間アメリカに渡ったが、そのときの印象をもとに作曲したのが有名な交響曲第９番「新世界より」、チェロ協奏曲である。弦楽四重奏曲「アメリカ」、「スラヴ舞曲集」もよく知られている。

◎**ウェーバー**［1786～1826 ドイツ］
ドイツ国民歌劇の創始者。オペラ
ピアノ曲「舞踏への勧誘」。

SAMPLE

◎**ロッシーニ**［1792～1868 イタリア］
数々のオペラで名声を得る。美食家としても知られる。オペラ「セヴィリアの理髪師」、「ウィリアム・テル」。

◎**ベルリオーズ**［1803～1869 フランス］
標題音楽に新たな息吹を与えた。「幻想交響曲」。

◎**メンデルスゾーン**［1809～1847 ドイツ］
音楽、音楽家の社会的地位向上に貢献し、指揮者としても活躍。ヴァイオリン協奏曲や劇音楽「真夏の夜の夢」の中の「結婚行進曲」はあまりにも有名。ピアノ曲集「無言歌集」。

◎**リスト**［1811～1886 ハンガリー］
当時のピアノ界のスーパースター。「ピアノの鬼神」といわれ、社交界で圧倒的人気を得る。交響詩という言葉は彼が使い始めた。交響詩「レ・プレリュード」、ピアノ曲「ハンガリー狂詩曲」、「超絶技巧的練習曲」、「愛の夢　第３番」。

◎**ヴァーグナー**［1813～1883 ドイツ］
楽劇の創始者。オペラ「タンホイザー」、「さまよえるオランダ人」。楽劇「ニーベルングの指輪」は「ラインの黄金」、「ヴァルキューレ」、「ジークフリート」、「神々のたそがれ」の４部作からなり、４夜にわたって上演される。

◎**ヴェルディ**［1813～1901 イタリア］
イタリア・オペラの第一人者。オペラ「椿姫」、「アイーダ」、宗教曲「レクイエム」。

◎**ブルックナー**［1824～1896 オーストリア］
教師をしながら音楽の勉強を続け、オルガニストとしても活躍。交響曲第４番「ロマンティック」。

◎**J. シュトラウス 2世**［1825～1899 オーストリア］
500曲以上の作品をのこした当時の人気作曲家。ワルツ「美しく青きドナウ」はオーストリア第２の国歌ともいわれる。その他にオペレッタ「こうもり」など。

◎**サン・サーンス**［1835～1921 フランス］
ピアニスト、オルガニストとしても活躍。「動物の謝肉祭」、交響詩「死の舞踏」。

◎**ビゼー**［1838～1875 フランス］
劇音楽に優れた作品をのこす。劇音楽「アルルの女」、
メン」。

［1858～1924 イタリア］
以後イタリア最大のオペラ作家。オペラ
「ラ・ボエーム」、「蝶々夫人」。

◎**マーラー**［1860～1911 オーストリア］
交響曲「巨人」、「復活」、「大地の歌」、歌曲「なき子をしのぶ歌」など。指揮者としての業績も大きい。

◎**リシャルト・シュトラウス**［1864～1949 ドイツ］
「ティル・オイゲンシュピーゲルの愉快ないたずら」、「ツァラトゥストラはかく語りき」、「英雄の生涯」など、多数の交響詩をこのした。オペラ「ばらの騎士」、歌曲多数。指揮者としても活躍した。

◎**ムソルグスキー**［1839～1881 ロシア］
ロシア国民楽派を代表する１人。組曲「展覧会の絵」、交響詩「はげ山の一夜」。

◎**スメタナ**［1824～1884 チェコ］
チェコ国民楽派の旗手。交響詩「わが祖国」中の「モルダウ」はとくに有名。

◎**グリーグ**［1843～1907 ノルウェー］
ノルウェー国民楽派の推進者。劇音楽「ペール・ギュント」、ピアノ協奏曲。

◎**シベリウス**［1865～1957 フィンランド］
フィンランドの神話や自然に霊感を受けた数々の名作をのこす。交響詩「フィンランディア」、「４つの伝説（第３曲「トゥオネラの白鳥」が有名）」。

◎**ラフマニノフ**［1873～1943 ロシア→アメリカ］
ピアニストとしても活躍し、とくに自作の演奏に人気があった。ピアノ協奏曲第２番、「パガニーニの主題による狂想曲」。